

あとがき

〈編集顧問〉

太田 保世
諏訪 邦夫
広沢 弘七郎
堀江 孝至
村山 正博

〈編集委員〉

相澤 久道
石坂 彰敏
和泉 徹
小川 聡
永井 良三
三嶋 理晃

〈編集協力委員〉

赤石 誠
赤柴 恒人
北風 政史
近藤 哲理
中沢 潔
(五十音順)

今月号では特集として「心血管疾患とエージング」が取り上げられている。高齢化する社会の中で避けて通れないテーマであるが、この課題に対する解決の道筋は未だ明確についているとはいえない。心房細動一つ取り上げても、社会の高齢化とともに確実に心房細動患者数は増加してきているにもかかわらず、高齢者心房細動患者への対応は未だ議論の多いところである。高齢そのものが血栓塞栓症の危険因子とはいえ、相対的な出血リスクの増加があるために抗凝固療法の適正使用が高齢者では進まない。抗不整脈薬に関しても、心機能、腎機能、肝機能への配慮を行うと自ずから選択薬の範囲、投与量に制限がつき若年者ほど治療効率が上がらない。近年、飛躍的に治療成績の向上している肺静脈の電氣的隔離術を含むカテーテルアブレーション治療も高齢者への適応は狭い。加齢に伴い全体に占める患者数の割合や治療の必要性が高くなるとはいえ、その治療選択肢は逆に狭くなるという現実直面している。

そうしたなかで重要になるのが、疾患そのものの発症予防である。その背景には疾患の発症機転の解明があることは言うまでもないが、様々な研究からそれが現実的になってきている。心房細動に関しても、心房筋の肥大、間質の線維化、細胞間結合の障害、イオンチャネル発現の変化など、いわゆる構造的ならびに電気生理学的リモデリングと言われる諸々の変化が加齢とともに発症と増悪に関わっていることが明らかとなっている。これらを抑制する薬剤、例えばアンジオテンシン受容体拮抗薬、アルドステロン拮抗薬、スタチン、抗酸化薬などが心房細動の発生のみならず増悪をも阻止することが多くのメカニズムでも証明されてきている。

より上流において発症を予防しようとするいわゆる「upstream therapy」の意義が、高齢化社会での全ての疾患において今後ますます見直されて行くはずである。
(小川 聡)

呼吸と循環 (第55巻 第11号)

2007年11月15日発行(毎月1回15日発行)

定価 2,730 円(本体 2,600 円+税 5%)

(2007年、年ぎめ予約購読料 31,800 円)
(税込み、配送料弊社負担)

E-mail: kotojun@igaku-shoin.co.jp

Web: <http://www.igaku-shoin.co.jp/mag/kotojun>

発行 株式会社 医学書院

代表者 金原 優

〒113-8719 東京都文京区本郷 1-28-23

電話 本誌編集室直通 (03) 3817-5703

(担当: 菊池・山崎)

販売部直通 (03) 3817-5659・5660

ファクシミリ (03) 3815-7802

振替口座 00170-9-96693 番

印刷所 三美印刷株式会社 電話 (03) 3803-3131

広告申込所 (株) 医薬広告社 電話 (03) 3814-1971

• Published by IGAKU-SHOIN Ltd. 1-28-23 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo © 2007, Printed in Japan.

• 本誌に掲載する著作物の複製権・翻訳権・上映権・譲渡権・公衆送信権(送信可能化権を含む)は(株)医学書院が保有します。

IGLS (株) 日本著作出版権管理システム委託出版物

本誌の無断複写は著作権法上での例外を除き禁じられています。複写される場合は、そのつど事前に(株)日本著作出版権管理システム(電話 03-3817-5670, FAX 03-3815-8199)の許諾を得てください。